

いま君に読んでほしい1冊：『ワンダー』

看護学部教授／図書・紀要委員会委員長 廣渡太郎（2018. 6. 22）

医療職者や介護職者をめざしている皆さんに、僕がいまぜひ読んでほしいと思う本の1冊に、R・J・パラシオ著『ワンダー』があります。舞台は、アメリカのニューヨーク・マンハッタン。「トリーチャー・コリンズ症候群」による障害を抱えて生まれ、新学期から5年生として初めて学校に通うことになる男の子オギーの物語を、オギー自身やその姉ヴィア、そして、オギーの周りのクラスメートたちの視点を交えて描いたヤング・アダルト小説です。

「トリーチャー・コリンズ症候群」という疾患があることを、恥ずかしながら僕はこの本で初めて知りました。顔の骨が十分に発育せず、顎や頬や耳がうまく形成されない先天性の難病で、日本にも5万人に1人の割合でその障害を抱えた人がいるといえます。

僕がこの本の存在を知ったのは、東日本大震災の翌年の春、ふと目にしたニューヨーク・タイムズ紙の日曜読書欄に掲載されていた書評記事がきっかけでした。その記事は、“Facing Up to It”（「それを直視して」）というタイトルで、障害と向き合うこと、そして「ふつう」であることの意味を考えさせる必読の書として、この作品を絶賛していました。記事のタイトルには、文字通り「顔をあげて、前をみる」というニュアンスもあります。東日本大震災を経験して以降、世の中が一変してしまい、僕もなんだか毎日伏し目がちになって暗澹たる思いで過ごしていたときだったからかもしれませんが、その書評がとても気に入り、作品を読んでみたいと思ったのです。

注文した本がアメリカから届いたとき、早速ちょっと眺めるつもりでページをめくった僕は、包みを開けたその横で、そのまま最後まで一気に読んでいました。それほど強いインパクトのある作品だったのです。この本からどれほどの感動と元気と勇気をもたらしたことか、ひと言ではとても言い表せません。

障害と向き合うこと、友情と仲間の力、親切の価値、他人に寄り添うとはどういうことか、自分を客観視することの難しさ、いじめ、差別、無理解……。この物語は、まさに「人道」とは何かを、さまざまな立場や視点から改めて考えさせるものでした。その意味で、赤十字の大学で看護や介護福祉を学ぶ皆さんにとって、とても意義のある作品のひとつではないかと思うのです。加えて、原著は皆さんと同世代のニューヨーカーが話す、いまふうの口語体の英語で書かれているので、英語の勉強にもうってつけです。

発表後、この本は瞬く間に全米でベストセラーとなり、その後、各国語に翻訳されて、現在までに、全世界で児童書としては異例の800万部を超えるミリオンセラーとなっています。

日本語版は 2015 年に、ほるぷ出版から刊行されました。また、2017 年にはハリウッドで映画化され、日本ではちょうど今月の 15 日から『ワンダー 君は太陽』というタイトルで全国ロードショーが始まりました。映画も封切と同時に観てきましたが、正直なところ、原作に比べるとやや物足りなさが残る印象は否めません。しかし、それでも胸をじんと熱くさせ、清々しい気持ちになれる素晴らしい作品になっています。

もしあなたがいま、実習や日々の勉強に追われて自分を見失いそうになっていたり、友だちや家族との関係で悩みを抱えていたりするのなら、もし自分の将来の夢や進むべき道に漠たる不安を感じているのなら、この本を読んでみてください。もちろん、この本が具体的なアドバイスや解決策を教えてくれるわけではありませんが、きっと新たな扉が開いて、いままでとは違う自分に出会えると思います。そして、英語の教師としては、ぜひ原書で読んでみることに挑戦してほしい。語り口や言葉遊びや、この作品で重要な役割を果たしている「格言」の数々は、日本語訳で読むより、実はもっとかつこよくて、ずっと面白いのです。

【紹介した本】

『ワンダー』 R・J・パラシオ著、中井はるの訳、ほるぷ出版、2015

WONDER R.J. Palacio, Alfred A. Knopf, 2012

